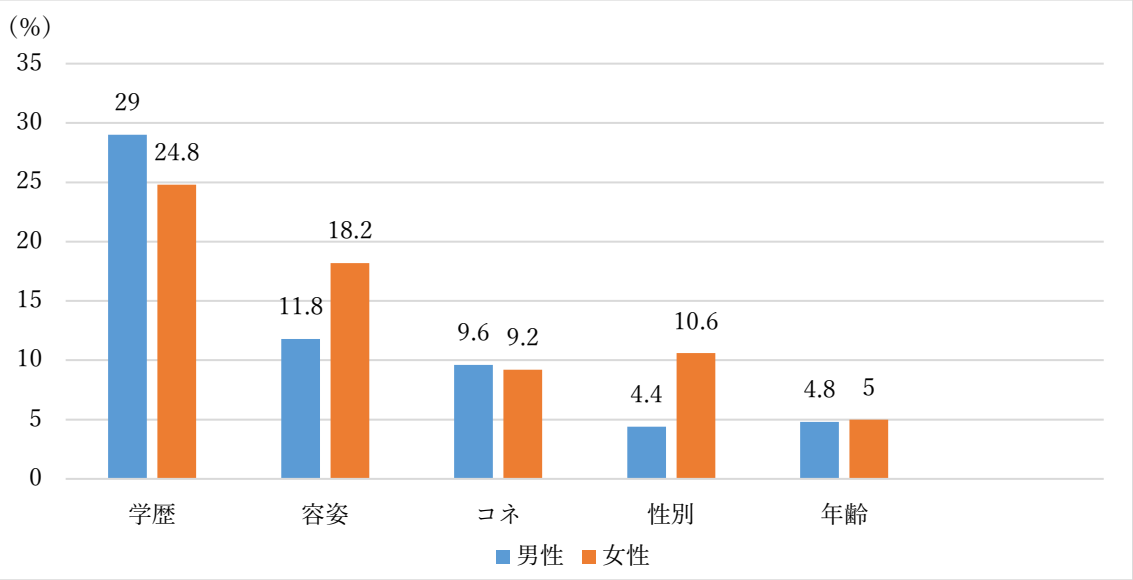
ルッキズムから脱却するための SNS での繋がり

香川県立香川中央高校 3 年 今治菜々香

『人は見た目が 9 割』という本がベストセラーとして書店の入口付近に平積みにされている現代では、迷惑な話ではあるが、我々は、いついかなる時も常に他人から「顔」について評価を受けながら生活を送っている。他人から偉そうに自分の顔を「採点」されることを避けられない時代となってしまったのである。我々は否が応でも常にそういった迷惑な「採点」をされ続けている。また、我々自身も顔で評価されているということを日々感じとっている。

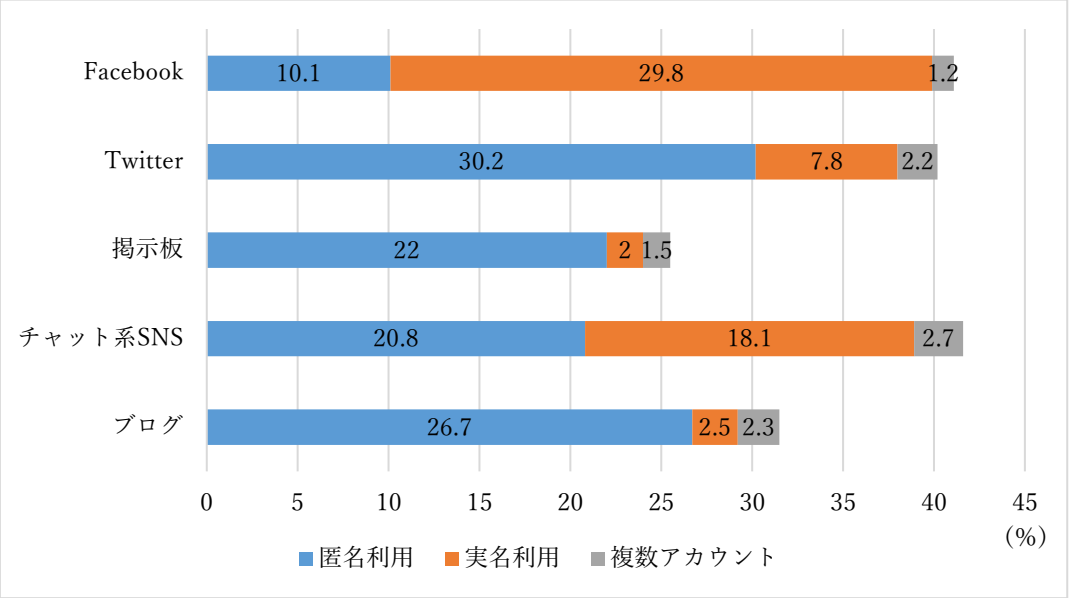


(【図 1】就職活動で「不当な選考をされた」と感じたところのグラフ)(1)

図 1 によると、学歴に次いで、就職活動で「不当な選考をされた」と感じたところは容姿だと挙げている人が多かった。本来、就職において見た目を考慮する必要はないのにも関わらず、就職には容姿が関わってくると考えている人は多いのである。このことからも分かるように現代社会では「顔に対する評価」という本来抽象的であるものが、都市の全域を覆うかのように蔓延してしまっている。

直接会って会話をするときは勿論、それだけでなく、親しい友達や知人とメールや LINE でやりとりするときでも、私たちは無意識に「相手の顔」を思い浮かべている。その意味で、その時に直接会って話しているわけではなくても、過去に一度でも顔を合わせている相手には、文面でやり取りしている時にさえ見た目のことを思い浮かべられている。常にこういった迷惑な「論評」に晒され続けている我々が「見た目の評価」を受けずにいられるような何者にも邪魔されない場所はいったいどこに存在するのだろうか。その答えは、顔を出さない SNS だろう。

今や世界で月間 3 億人が利用する Twitter、そこでは「一度も会ったことのない」相手とのやり取りが主である。むろん、親しく気心の知れた友達と会話を楽しむ、という使い方で Twitter を楽しんでいる人々も一部いることは否定できない。しかし、やはり Twitter という場において繰り広げられる現象というのは、先程も述べたとおり、「知らない人」との会話のやり取りであることは言うまでもないだろう。そこでは、設定されたアイコンは自分の好きな車の写真であったり、アニメや漫画に登場するキャラクターであったりと様々であるが、共通して言えることは「自らの顔写真ではない」ということだ。また、名前から個人を特定して顔の評価に晒されることを危惧して、実名ではなくニックネームやハンドルネームなどの仮名を使い、匿名性を保って利用している人も多い。



(【図 2】SNS の利用有無と匿名・実名利用の比率のグラフ) (2)

図 2 を見ると、Twitter では匿名利用の比率が 30.2%と最も高いことが分かる。このように、人々は個人の匿名性を保ち、顔の評価から逃れようとしている。つまり、自らの顔を「採点」されることを、自らの意思で避けられるのである。

現実の社会において我々は常に相手の表情を読み取りながら会話をしている。それは同時にお互いの顔を「評価」することに繋がる。しかし、本来の顔を持ち込まないヴァーチャルな空間においては、様々な種類のアイコン画像を設定したり、匿名で利用することで、自分のルックスを覆い隠す。そこでは、各ユーザーは、相手の見た目を評価することなく言葉のやり取りをする。現実世界で我々が行っている会話と比べると、かえって「異質」な会話であるのは間違いない。

常に他者から自己の見た目を評価され、自らもまた他者の顔を評価する、そういう本

来の会話の内容とは無縁で必要ないはずの要素を私達は常に気にかけながら相手とのやりとりを行っている。もちろん、人間の顔というのはそういう些細な変化を細やかに相手に伝えるために巧みな進化を遂げてきて、その表情の些細な変化を目ざとく拾い上げる私達も言葉以外のコミュニケーションを円滑にするために進化してきたものであることは言うまでもない。言葉にこそされていないものの話者にとっては伝えておきたい細かいニュアンスのようなものは、話者の実に細かな顔の表情の変化に現れ、その些細な変動を一つ一つ拾い上げ、理解する機能を私達は進化する中で獲得してきた。このことは皆が認めることであるし、言葉にされていない想いの大切さを、文脈の中で多くの人が重要視していることは今さら言うまでもないだろう。

しかし、現代社会におけるそれは過剰な域に達しているのではないだろうか。言葉以外の意図を汲み取ろうとするあまり、言葉内の情報を疎かにするのはマシで、我々は今日、他者の顔を非言語コミュニケーションのためではなく単に顔の内容を論評するためにまじまじと眺めて、その結果を会話を通して自分達が受ける印象の大部分としている。この現代に生きる私達は、本来補助的な要素であるはずの「ルックス」にあまりに大きく引きずられすぎているように私は思っている。「ルックス」が実社会に影響を及ぼしている事例として、コーネル大学による模擬裁判の研究(3)がある。研究によれば、論理よりも感情で物事を判断しがちな陪審員が、被告人の容姿をより重視する傾向にあり、魅力的ではない被告人に対して 22%も多くの割合で有罪の結論を下し、有罪の場合には平均して 22 ヶ月も長い量刑を下すよう求めたという。このような事例からも分かるように、「ルックス」は日常会話だけでなく、裁判の判決にも影響を与えている。相手の顔がどんな見た目をしているかなんて、会話の内容そのものに比べたら本当は二の次なはずである。

そのような補助的で本質的ではない情報を捨て去って、ヴァーチャルな、現実とは切り離された空間で見た目に左右されずに自由な会話を楽しみたいという人も多いのではないだろうか。その空間にあるのは本来不必要である要素が捨て去られ、話したい内容という本質だけが抜き出された、実に有意義なコミュニケーションである。

外見での差別、いわゆる「ルッキズム」から脱却すべきだと世間で叫ばれている近頃、ヴァーチャルな空間において、自分の好きなアイコンで己の本来の顔を覆い隠し、絶え間ない見た目の論評から脱出し、価値ある本質的な「会話」を楽しむことは、そうした迷惑な論評に日々苛まれ続けている現代の私達にとってのある種の救いとなり得るだろう。休まる暇もなく顔の評価に晒される現代人が逃げ込める場として、顔を出さない SNS は、ルッキズムが生育できない「聖域」となる。常に無意味な採点に晒され続け疲れ果てた我々にとって、よき避難所となっているに違いない。言葉以外の要素にも意思疎通の能力を与えてしまった現実の世界とは違って、SNS では伝えたい情報の全てを一つ一つの言葉に背負わせることになり、重みを増した言葉はその真価を発揮する。余計なものなど何も付随していない、言葉それ自体に込められた思いを私達は受け取るこ

とが出来る。

SNS では、言葉のみの会話だからこそついつい暴発してしまい炎上してしまうのでは無いか、といった意見もあるだろう。実際に、匿名性から実名性にすべきだという意見もある。しかし、匿名性であるからこそ、リアルな世界では見せることの出来ない意見や自分を明かすことが可能となり、様々な意見の交流を交わし、自分にはなかった発想を見つけることができる。

顔を出さない SNS では、発言内容そのものが重視され、誰も発言者の顔など全く気にしていない。つまり、現代社会の問題である、「ルッキズム」の解決手段となるのでは無いだろうか。SNS 上での人と人との繋がりでは、顔を出さず、言葉に重きを置いて会話をするため、言葉が唯一の意思伝達の道具となっている。そのため、ヴァーチャル空間という誰にも侵されることない、自分達だけの「聖域」に立ち入るとき、私達は見た目に左右されない世界で現実世界では晒すことのできない本当の自分を明かすことができる。現代社会において「顔」を評価され続けていることに疲れている我々にとって SNS での他人との繋がりはゆっくりと心を休めることのできる安息の地となるのではないだろうか。

【引用・参考文献】

(1) 中日新聞
〈容姿で偏見「ルッキズム」〉(前編) 外見差別、なぜ起こる？
https://www.google.co.jp/amp/s/www.chunichi.co.jp/amp/article/246933

(2) 総務省情報通信白書
https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h26/html/nc143120.html

(3) The Cornell Daily Sun
http://cornell.com/2010/04/26/cornell-study-juries-convict-attractive-people-less-often/

Justin J. Gunnell, Stephen Ceci (2010) When emotionality trumps reason:A study of individual processing style and juror bias,Behavioral Sciences& the Law.vol 28,issue6,p.850-877

https://onlinelibrary.wiley.com/doi/10.1002/bsl.939